

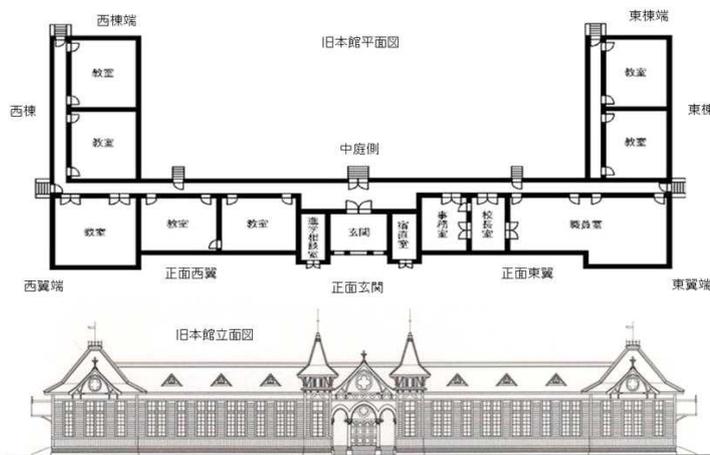
ぶらい旧本館

—同窓生の思いを紡ぐ「アカンサスの学舎」—

明治30年(1897)に創立した県内有数の伝統校である本校には、明治37年(1904)に駒杵勤治の設計により創建された荘重なる旧茨城県立土浦中学校本館(以下「旧本館」という)があります。この国指定重要文化財の旧本館は、「アカンサスの学舎」と呼ばれ、本校卒業生を始め多くの方々に愛され大切に守られてきました。旧本館は、まさに本校のシンボル、宝であり、また茨城県、国の宝です。

ここでは、これまでに撮り溜めてきた写真を基に旧本館の魅力を紹介します。これからご案内する順路は、旧正門から校地に入り旧本館正面玄関から左回りに正面東翼、東棟、中庭側、西棟、正面西翼の順に一周して外観を観ていただきます。さらに正面玄関から校舎内に入り、東翼の校長室や職員室、東棟の東教室、そして正面の玄関ホールに戻って西翼の応接室や復元教室、西棟の西教室の順に進んでいきます。

それでは、本校同窓生3万余の思いを紡いできた壮麗な旧本館を、ご一緒にぶらり散策しましょう。



新緑の旧正門

1 旧正門 —旧水戸街道に面した重厚な門—

旧水戸街道の真鍋坂を登り切ると右手に重厚な旧正門が現れます。春夏秋冬、生徒を見守り続けてきた旧正門は、旧本館創建時に設置されました。現在の旧正門は、昭和49年(1974)に復元されたものです。

2 前庭 —静かに鎮座する古木—

旧正門から一步、校地に足を踏み入れると、学校とは思えないほど鬱蒼とした木々と静寂に包まれます。緩やかな上り坂を進み、左に折れると旧本館前庭の緑豊かな庭園が広がります。特に目を引くのが、樹齢110有余年となるクスノキの巨木です。クスノキは明治39年秋、2人の教員が苗木を植樹したものです。その他の古木は、明治38年1月、中学校新設祝いとして地元真鍋町の各戸から1株ずつ寄付されたものだそうです。



緑豊かな前庭



春爛漫の旧本館。しだれ桜



クスノキの巨木

3 旧本館の建築概要

—ゴシック・リヴァイヴァル様式を基調に「外観の美」を追求—

旧本館は棟札等によれば、明治37年7月5日に上棟同年12月7日に竣工しました。設計・施工監理者は県技師の駒杵勤治、請負人は石井権蔵、工事監督は塚越斧太郎、大工棟梁は青木仙次郎でした。そして大勢の職人たちが、校地内の飯場や近隣の借家で寝泊まりして工事に当たったそうです。

旧本館全体のプロポーションは、両翼を後方に張り出した凹字型の木造平屋で片廊下式です。左右対称性と荘重な正面性を重視した古典主義建築を踏襲しています。駒杵は特に「外観の美」を重視して、正面玄関の三連尖頭アーチに切妻破風を載せた玄関ポーチを設け、その両側に尖塔を構えています。さらに東西両翼端に切妻破風、正面東西両翼屋根面に各3個ずつ設けたドーマー窓、そして連続する縦長窓などたくさんの垂直体を用いています。ここには垂直性を特色としたゴシック建築の影響が強く見られます。ゴシック様式は、12世紀にフランスで発祥し15世紀に廃れますが、18世紀になるとその装飾や建築形態を復興しようとする動きがイギリスから巻き起こり、アメリカに広がります。これをゴシック・リヴァイヴァル（ネオ・ゴシック）といいます。ゴシック様式は、主に教会建築に多く見られ、旧本館も教会の礼拝堂のような趣があります。

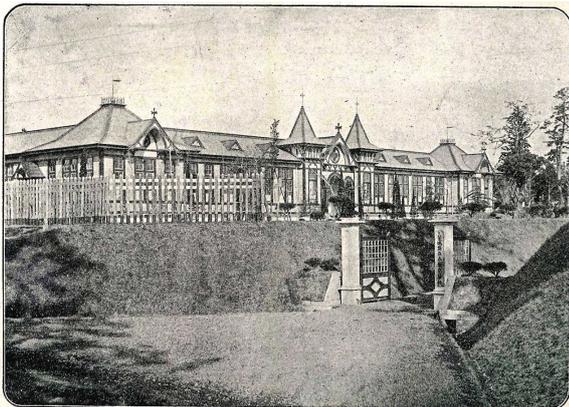
なお、駒杵が学び恩師辰野金吾が設計した旧東京帝国大学工科大学本館は、ゴシック様式を基調にしたもので、本校旧本館とよく似ています。駒杵が旧本館を設計する際に、この工科大学本館の全体的な構成を下敷きにしたことは十分に考えられます。また細部の意匠は、多様な様式を折衷しながら古典装飾を簡略化した大味な図案が多く用いられています。



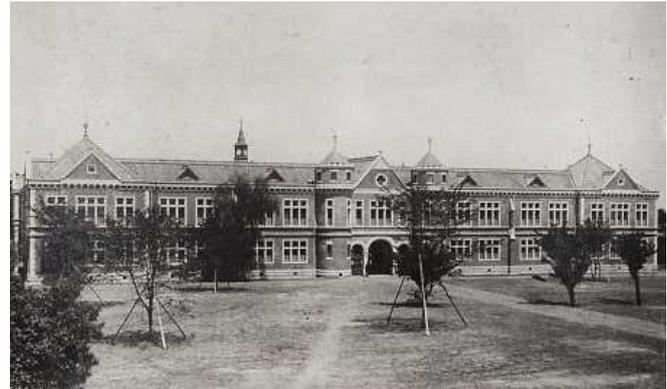
棟札(表面)



棟札(裏面)



創建当時の旧本館 舎校新銅興校學中浦土



旧東京帝国大学工科大学本館(辰野設計)

4 旧本館建築の意義

—格調高い学校建築—

【アメリカ・コロニアル様式を加味】

明治の日本には世界から多様な建築様式が入ってきました。駒杵は、旧本館設計に当たってゴシック・リヴァイヴァル様式をベースにししながらコロニアル様式や木骨様式(スティックスタイル)などを積極的に取り入れたと思われます。コロニアル様式とは、イギリス植民地等で発達した様式であり、日本にはアジア経由の東回りと北アメリカ経由の西回りの2コースで伝来しました。東回りは、旧グラバー住宅などのようにヴェランダ(屋根付き縁側)が特徴です。西回りは、札幌市時計台などのように下見板張りを特徴として明治初期に北海道開拓の根拠地である札幌を中心に「亜米利加風」と呼ばれて流行りました。この様式は、北海道と頻りに交流していた山形県に真っ先に伝わり、下見板系擬洋風建築が次々と出現しました。駒杵は、山形県尋常中学校在学中の明治20年代にそれらの擬洋風建築物を目の当たりにして建築家を目指したといわれています。駒杵



旧札幌農学校演武場(札幌市時計台) 1878(M11)築 西回りコロニアル(アメリカ・コロニアル)様式

が旧本館の設計に当たっては、西回りのコロニアル(アメリカ・コロニアル)様式の流れを汲む擬洋風建築が美の根底にあったようにも感じられます。後の我が国の住宅建築に大きな影響を与えたコロニアル様式を旧本館のような大規模な建物に応用した例は稀であり、ここに駒杵の独自性が表れています。

駒杵は、おそらく当時の通例に従って欧米の「スタイルブック」(建築様式図集)などから様々な洋風建築技術を学び、設計施工していったと思われます。しかし、欧米の建築様式をただ単に真似するのではなく、古典装飾を大胆に図案化し、その校風や地域に応じて自分なりの創作性を出しながら設計を進めました。こうして若き駒杵は、情熱をほとぼしらせながら次々と作品を造っていきました。その力量は、高く評価されるべきものです。

【重要文化財の国指定】

昭和49年(1974)8月9日、旧本館改修工事の施行監理に当たった建築史家のいつしきふみひこ一色史彦氏(高11卒)が、正面玄関屋根裏から「棟札」を発見しました。棟札には旧本館設計者が駒杵であることが記してありました。これは、それまでのドイツ人設計説を覆す大発見となりました。このことから、昭和51年(1976)に旧制中学校校舎としては全国で初めて国の重要文化財指定を受けることになりました。優雅で気品ある本校旧本館は、明治後期の格調高い学校建築として、また土浦一高のシンボルとして末永く輝く続けるものと思われます。なお、旧制中学校の国指定重要文化財は現在、全国で6件です。

5 設計者「駒杵勤治」 —鮮烈に駆け抜けた新進気鋭の建築家—

駒杵は、明治10年(1877)に羽前国最上郡新庄町(現山形県新庄市)に生まれ、山形県尋常中学校(現山形東高校)から仙台市の第二高等学校(現東北大学)へ進み、さらに東京帝国大学工科大学建築学科(現東京大学工学部建築学科)に入学しました。そして明治35年(1902)に茨城県知事の河野忠三に招聘され正規の卒業よりも7ヶ月も早く卒業して、25歳で茨城県に奉職しました。

赴任してわずか2年3ヶ月の在職中に、新進気鋭の技師として本校旧本館や旧太田中学校講堂など9件の本格的洋風建築を手がけました。それらの作品は、いわゆる擬洋風建築(文明開化様式)とは違い、高度な学識に裏付けられた、いわば正統洋風建築であり、建築史的にみても貴重なものとなっています。

その後、茨城県を離れ内務省や海軍省の技師として伊勢神宮遷宮造替や旧長崎県立佐世保中学校本館建築に関わりました。のち福岡市に設計事務所を開設して大正8年(1919)2月27日に福岡市の自宅で42歳という短い生涯を閉じました。

平成31年(2019)は、没後100周年となります。茨城県及び本校に多大な貢献をした駒杵を称え、記念の行事を期待したいところです。



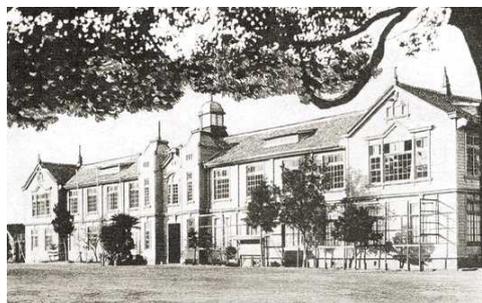
旧太田中学校講堂(M37築)〈現太田第一高校〉



駒杵勤治(1877~1919)



旧県立商業学校本館(M37築)〈現水戸商業高校〉



旧佐世保中学校本館(M42築)〈現佐世保南高校〉

6 正面玄関 —中心に重きを置きたるもの—

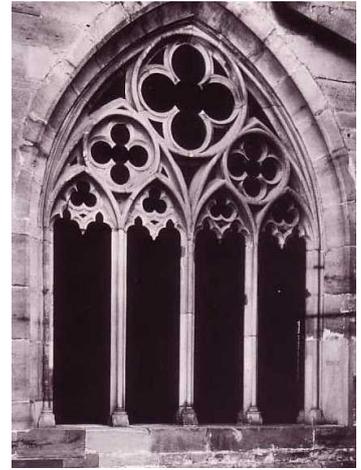
さて、いよいよここからが旧本館案内の始まりです。まず正面玄関です。ここはこの建物の中で最も目を引く部分です。駒杵は、「中心に重きを置きたるもの」「中心線両翼相等しきもの」「式的一致

して混用なきもの」を洋風建築の基本理念として、「外観の美」を追求しました。そこで旧本館設計に当たっては、玄関など正面中心部を豊富に装飾するとともに、左右対称にしてゴシック様式で統一しています。まさに旧本館は駒杵の建築理念の結晶です。具体的には、正面にゴシック建築の典型的な意匠となる三連尖頭アーチやトレーサリー（狭間飾り）のモチーフを簡略化して玄関を飾り、その両隣に尖塔を配置しました。

トレーサリーとは、元来はゴシック建築の窓の飾り格子であり、尖頭アーチの上部を幾何学や曲線模様などに仕切って、ステンドグラスをはめていました。駒杵はトレーサリーを大胆にアレンジし、木骨様式の華やかなデザインで玄関を飾ったものと思われます。ドイツのマウルブロン修道院回廊北翼のトレーサリーは、旧本館玄関と似ており、特にカトルフォイル（四つ葉）はそっくりですので、参考にしたかもしれません。



三連尖頭アーチとトレーサリー



マウルブロン修道院（ドイツ）

7 尖塔

—装飾の粋を尽くして—

旧本館では玄関両側に急勾配屋根の尖塔が設置され、正面の装飾性を高めています。尖塔とは、細長く先がとがった形の屋根を持つ塔であり、ゴシック様式の教会などに多く見られるものです。軒下には、ポールフラワー



旧本館尖塔方位針



工部大学校陸碑尖塔方位針（復元）

（円花飾り）が付けられ、より装飾性を高めています。各尖塔の先端部にはNEWSの方位針が



玄関両側の天を突く尖塔

設置されています。駒杵の恩師辰野金吾が学んだ工部大学校小学館（東京市虎ノ門）の尖塔方位針に似ており、参考にしたかもしれません。

8 カトルフォイル

—四つ葉で幸運を呼び込む—

駒杵は、旧本館正面の玄関中央の最も目立つところにカトルフォイルを象徴的に配しています。また、玄関扉上部の丸窓ガラスや左右両端の切妻破風の庇飾りにも採用しています。さらには、カトルフォイルをアレンジして玄関扉の窓枠、各部屋のドア、天井や基礎の通気孔などにも多用しています。



玄関扉上部の丸窓ガラス

ゴシック建築では、トレーサリーに葉模様を使うことが一般的です。この葉模様をフォイル（葉形）といいます。フォイルは三つ葉をトレフォイル、四つ葉をカトルフォイル（クワトロフォイル）、五つ葉をサンクフォイル



正面玄関のカトルフォイル

といいます。駒杵は、三つ葉や五つ葉ではなく、なぜ四つ葉を選んだのか、その真意は分かりませんが、西欧では四つ葉は十字架に見立てられ、幸運の印とされていたので、学校に幸運を呼び込むために多用したの